

スペイン語における身体名詞の意味拡張

—— 語彙の意味構造からの一考察 ——

徳 永 志 織

Resumen

El objetivo de este estudio es presentar que las expresiones idiomáticas o metafóricas, que provocan cierta dificultad a los aprendices no nativos en realidad no son difíciles de aprender y sirven de herramienta útil tanto para hacer comprender cómo descodificar textos como para permitir acercarse y familiarizar a los estudiantes a una cultura diferente.

Se considera, en general, que esas expresiones carecen de construcciones semántica. Sin embargo, a mi parecer, sí la tienen y se descodifican de igual modo que las literales: las expresiones idiomáticas ofrecerán a los estudiantes la oportunidad de aprender la manera de interpretar textos usando su propio conocimiento sobre el español.

A lo largo de este trabajo intentaré mostrar cómo se descodifican las frases idiomáticas de modo literal y para ello tomaré como ejemplo el uso figurado de sustantivos concretos como los que hacen referencia a partes del cuerpo y a animales. El hecho de que nos refiramos a objetos comunes en ambas lenguas hará que sea más fácil suponer la aplicación de los sentidos de estas frases. Por otro lado, si se encuentra diferente ampliación del sentido de una palabra concreta seguramente se relacionará con su propia cultura, lo cual será útil a los estudiantes para conocerla.

キーワード：語彙構造, 比喩・慣用表現, 語学教育

I. はじめに

本稿では、構成要素の意味の総計からは全体の意味が予測しにくいことによりスペイン語を学習する学生が習得に困難を感じる比喩、慣用表現¹⁾を取り上げ、語が構造化された意味構造を内包すると考え

¹⁾ Penádes Martínez (1999) によると、研究者の間で若干の祖語はあるものの、fraseología は paremias, fórmulas rutinarias, locuciones, colocaciones の4つのタイプに分類される。本稿で扱うのは主に locuciones に相当するものである。

ることにより、その多くは字義通りの解釈と同じプロセスを経て得られるものであることを示す。そのために、その役割・形式などが言語を超えて共通であることからその比喩的解釈が比較的容易であると推察される身体部位を表す名詞を含む表現について考察する。

身体部位を表す身体名詞はその意味から一義であると考えられるが、実際にはコンテキストにより様々な解釈がなされる。例えば、スペイン語で「舌」を表す語である *lengua* は「言語」をも意味する。これはラテン語を祖とするロマンス諸語に一般的にみられる現象であり、フランス語の *langue*、イタリア語、ポルトガル語の *lingua*、ルーマニア語の *limbă* などが「舌」と「言語」の意味を担う。同様に、日本で第一外国語として学習されている英語に目を向けてみると、「言語」を表す語として一般的に使用されているのは「舌」の意味をもたない *language* であるが、その形からもわかるように、*language* の語源はラテン語の *lingua* であり、ロマンス諸語の場合と同じである。一方、英語で「舌」を表す *tongue* は、特定の環境下で「言語」を表すこともある。²⁾ 日本語に目を向けると、「舌」が「言語」を意味することはないが、「舌が回る」「舌の根も乾かぬうち」など、「舌」と「言葉遣い」を結び付けた表現は多々見られる。つまり、「舌」と「言語」はさまざまな言語で親密な関係を持ち、「舌」がしばしば「言語」に関する表現に表れていることがわかる。それは、舌が構音器官として重要な役割を果たし、言語をつかさどることに起因すると考えられる。「舌」を表す語は言語を超え「言語」に関連する表現に使用されていると推察される。それは、「舌」が言語の基本である「音声」を構成する構音器官であるためであり、その機能は言語を超えた共通機能であることによると考えられる。

また、*lengua de gato* 「(直訳) 猫の舌→ラングドシャ (菓子)」、*lengua de tierra* 「(直訳) 土地の舌→岬」*media lengua* 「(直訳) 半分の舌→舌足らず」など、*lengua* を用いて身体器官以外を示す例も多く見られる。これらの例を見ると *lengua* の形状や機能に基づくものであると推察される。

以上のことから、一見一義であると思われる身体名詞が多義であることがわかる。前述の *lengua de gato* 「ラングドシャ」であるが、菓子店でこのような表現を目にして、本当の「猫の舌」が販売されているとは考えないであろう。このようなラベルがついたクッキーやチョコレートを見たときに、「猫の舌の形をしたクッキーやチョコレート」と理解し、記憶に刻むことになる。その後、オンラインショップや広告などで「*lenguas de gato (Caja grande) 23€*」³⁾ という文言を見ればそのタイプのお菓子がその値段である、と理解される。最初に名称とお菓子を関連づける必要はあるが、その名称は形状などの類似性からのものであり、コンテキストにより適切に意味を判断することが可能であろう。

本稿では、このように語彙が字義通りではない解釈を受ける例を考察の対象とし、その多義性がどのように生成されるのかを示す。注目すべきは、外国語であっても、ある程度の知識を有していれば特に

2) よく耳にするのが「母語」を表す *mother tongue* 「母語」であるが、他には *a slip of the tongue* 「言い間違い」、*have a bitter tongue* 「口が悪い」、*have a ready tongue* 「雄弁である」など、話しぶりに関する表現で使われることが多いようである。

3) La Mallorquina オンラインショップ (https://pasteleriamallorquina.es/caja-lenguas-de-gato-grande/?srsltid=AfmBOoqdy_7tjOLRpo3YN6UaI5wtpngXWFnbpwwf8gmXbZnxrOvhEQYy)

苦勞なく字義通りではない解釈が可能である、という点である。それは語彙自体が何らかの情報を構造的に内包しており、その一部が共起するその他の語彙との関係から焦点化され、適切な解釈がなされるためであると考えられる。

近年の学生は外国語学習にあたり、単語を習得することを非常に重視する傾向にある。それを否定することはないが、辞書や単語帳に1つの語彙が表す全ての意味を記載することはほぼ不可能であろうし、学生自身が記載されている意味を全て暗記することも同様である。そうであるとするならば、語彙が内包する情報に着目し、その語が実際に使用される場合にはどのようなプロセスを経て様々な、そしてそのコンテキストに適切な解釈を得ることができるのかを示すことができれば、学生の外国語学習にも役に立つと考える。

語彙の多義性を意味拡張という視点から分析し、またそれをスペイン語教育に応用するという目的から、本稿では身体名詞 *pie* 「足」を考察の対象とする。前述のように身体名詞はその特徴から一義であると考えられるが、実際には多義であり、またこれらを用いた慣用表現は非常に多い。⁴⁾ 慣用表現とはその構成語彙の基本的意味の総計からは離れた特別な意味を表すものであるとされているのであるが、多くの場合、慣用表現の意味は構成語彙の意味から予測可能であり、それは中核となる語が情報として所持している一部が焦点化されているものであることによると考えられる。この視点から、スペイン語の *pie* 「足」を用いた慣用表現を取り上げ、それらの意味の生成過程を共起する他の語彙との関係から観察し、近年の学生が苦手としているコンテキストにおける語の解釈への応用を考える。身体名詞を取り上げる理由は、前にも述べたように、言語を超えてすべての人間が所持し日常生活において使用しているものであるため、その名詞が内包する情報（機能・形状など）についてはすでに学生が熟知しており、意味拡張が理解しやすいと考えるからである。分析の枠組みとして、語彙自体に多義性につながる情報が内包されていると考える生成語彙論、そして人間の認知の仕方が言語表現に深く結びついているとする認知言語学的視点を取り入れる。⁵⁾

II. 語彙の意味拡張メカニズム

一つの語彙が様々な意味をもたらすプロセスを示す前に、語彙が内包する情報構造についてみておきたい。前述のように、身体名詞が字義の意味には解釈されない場合、その意味は身体名詞の形状・機能

4) Nissen (2006) によると、アメリカ英語の慣用表現の1/6が身体表現を用いた表現であり、ドイツ語でも同等以上の慣用表現において身体名詞が用いられているということである (Nissen, 2006: 96)。

5) 生成語彙論と認知意味論は理論的にそぐわないという研究者もいる。それは、前者が多義性は全て語彙の内部構造によるものであるとするのに対し、後者は外界との関係で言語や思考を考えるものだからである。(De Miguel, 私信) しかしながら、筆者は、両者は密接に関係するものであると考える。生成語彙論において明示される語彙内部構造がどのように実際の言語運用において使用されるかを観察・分析することが認知意味論の枠組みで可能になると考えるからである。また、本稿は語彙の意味拡張メカニズムに関する説明が生成語彙論の考えを取り入れることで、より体系的に示されると考えるのであるが、生成語彙論全体の有効性について言及するものではないため、この理論で提案されているすべての構造、操作に言及するものではないことを述べておく。

などが焦点化されたものが多い。これらの情報は身体名詞そのものが持つものであるが、生成語彙論 (Pustejovsky, 1995) の枠組みではそれぞれ特質構造に記載されていると考える。

まず、簡単にこの枠組みについて概観しておきたい。生成語彙論では、語彙項目が全ての意味的情報を完全に網羅しているわけではなく、一部属性が未指定となっており、共起するその他の要素、つまり文脈によりその未指定の部分が補完されることにより、その語彙の文脈に適合する意味が生成されるとしている。それぞれの語彙項目に内包されている情報は次の4つの表示レベル——特質構造、事象構造、項構造、語彙階層構造——から構成され、これらが共起する語彙間で相互に関係し、情報の補完や読み替えが行われ、適切な解釈がもたらされるのである。本稿では特に特質構造、事象構造に焦点を当て、分析を試みる。⁶⁾

1. 特質構造

特質構造には語彙意味の基本となる4つの情報——主体役割 (rol agente)「対象物の起源、発生に関する要因」、構成役割 (rol constitutivo)「対象物とその構成部分の関係」⁷⁾、形式役割 (rol formal)「対象物を同じ範疇の他の物から区別する特徴」、目的役割 (rol tético)「対象物の目的と機能」——が含まれており、同一文がコンテキストにより様々な解釈されることが説明できるとする。

(1) He empezado una novela.

(2) a. He empezado a leer una novela. 「私は小説を読み始めた。」

b. He empezado a escribir una novela. 「私は小説を書き始めた。」

(1) は、直訳すると「私は小説を始めた」であるが、それだけでは何を意味しているのか理解できない。しかしながらこの文は (2) に示すように適切に解釈されることが可能である。この文がどちらの解釈を受けるかは、コンテキストにより決定される。一般的な解釈としては (2a) であろうが、(2b) の解釈も可能であり、これらの解釈は次のような過程を経てもたらされる。

empezar はその第二項 (目的語) の位置に「事象」を要求する動詞であるが、(1) の文の場合、そ

⁶⁾ 項構造と語彙階層構造について簡単に述べておく。項構造にはその語彙がとりうる4つのタイプの項 (必須項、デフォルト項、影の項、付加詞) が規定されている。必須項は必ず実現されなければならない項、デフォルト項は意味的には含意されているが統語的には必ずしも実現される必要のない項、影の項は語彙の中に意味的に組み込まれており、特別な追加情報がない限りは実現する必要のない項である。また、その他に付加詞も項に加えられているが、これは意味的・統語的には必要とされていないが文に生起し時間や場所を表す要素を指す。例を示すと、Marta vendió su casa (下線部は必須項)、María vendió su casa a su hermano (下線部はデフォルト項)、Marta vivió una vida muy dura (下線部は影の項)、Marta vendió su casa el año pasado (下線部は付加詞) となる。語彙階層構造というのは、特質構造のそれぞれの役割に関する上位・下位の関係を説明するものであり、各役割により独立して定義される。

⁷⁾ Climent Roca (2000) に従い、本稿では構成役割を “La relación entre una entidad y sus partes; y también la relación entre una entidad y aquella entidad compleja de la que es parte” とする。つまり対象語彙とそれを含む全体の関係についても記述していると考えられる。

の位置には「物」を表す名詞句 *una novela* が置かれている。そこで *una novela* にタイプ強制⁸⁾が適用され、(2) に示す2つの解釈が得られる。では、なぜ「物」を表す *una novela* が「事象」に再解釈されるのかというと、語彙の特質構造に「事象」についての情報が含意されているからである。名詞 *novela* の特質構造は次のように示される。

(3) *novela*

QUALIA (役割)	=	CONSTITUTIVO (構成)	=	narrativa (x)
		FORMAL (形式)	=	libro (x)
		TÉLICO (目的)	=	leer (y, x)
		AGENTIVO (主体)	=	escribir (z, x)

この構造は、「*novela* は「読むために」(目的役割)「書いた」(主体役割)「話により構成された」(構成役割)、「本という個体」(形式役割)であることを示している。一方、動詞 *empezar* は「(事象を)始める」ことを意味するのみで、どのような「事象」が始まるかについては未指定である。この未指定の部分が第二項 *novela* の特質構造に「事象」として指定されている目的役割と主体役割が読み込まれ、(2) のような2通りの解釈が可能となるのである。⁹⁾

ただし、常に *empezar* の第二項として実現される名詞句の特質構造に記載されているすべての「事象」がこのような読み替えの対象となるわけではない。例えば、De Miguel (2009: 349) によると *novela* と類似した特質構造を持つと想定される *diccionario* 「辞書」が *empezar* の第二項となる場合、主体役割のみが読み込まれ、(5) の解釈のみえられ、目的役割が読み込まれることはない。

(4) He empezado el diccionario.

(5) He empezado a {redactar/escribir} el diccionario. 「私は辞書を編纂／書き始めた。」

⁸⁾ Pustejovsky (1995) は、語彙の結びつきが様々な解釈を与えるかをタイプ強制 (coacción de tipos)、選択束縛 (ligamiento selectivo)、共合成 (cocomposición) という3つの生成デバイスを用いて説明する。タイプ強制とは、語彙間で不整合が起きた場合、項を予測されるタイプに変換するものである。(1) の例文は、動詞 *empezar* がその第二項(目的語)に「事象」を表す名詞句を必要としているにも関わらず「物」を表す *una novela* が置かれたため、タイプ強制により *empezar* が要求する「事象」に読み替えられたと説明される。

⁹⁾ さらに限定的な読みも可能である。He empezado la novela は 'He empezado a traducir la novela al japonés' 「私は小説を日本語に訳し始めた」あるいは 'he empezado a revisar la novela' 「私は小説を校閲し始めた」と解釈することが可能であるが、Revisar や traducir は leer のメトニミーもしくはその下位語と考えられる。また通常では解釈が難しいと述べた He empezado el diccionario も、辞書を本のように「読む人」がいれば 'He empezado a leer el diccionario.' の解釈も可能であろう。これらの解釈はプラグマティックなレベルのものであり、特質構造に記載されている情報とは異なるレベルのものである。

この違いは, *novela* と *diccionario* の目的役割に指定された動詞の事象構造の違いによると De Miguel は述べている。

2. 事象構造

動詞及びそれが表す事象の分類については Vendler (1957) による「状態」「活動」「達成」「到達」の4分類が広く認識されているが, Pustejovsky (1991) は「達成」と「到達」を「推移」として統合し¹⁰⁾, 次の3タイプの事象を示す。(4c) は「達成」と「到達」の両者を含むものである。

(6) a. Estados : E[e] (状態)

b. Procesos : P[e1...en] (過程)

c. Transiciones : T[\rightarrow e1,e2] (推移)

しかしながら e1 が新しい状態 e2 をもたらす「過程」である場合, c は次のようにも表示される。

c'. Transiciones: T[P, E]¹¹⁾

ここで, 前節で取り上げた (1) と (4) の違いについてみておきたい。 *diccionario* 「辞書」の目的役割は *conocer la palabra* 「単語 (の意味) を知る」であり, この動詞の事象構造は (6c) であり, (6c') のように P 「過程」は含まない。¹²⁾ 一方, (1) の *la novela* の目的役割は *leer* であり, その事象構造は (6c') である。動詞 *empezar* はその第二項に「事象」を表す名詞を要求するが, 同時に「～を始める」という意味によりその「事象」が継続的に進むもの, つまり P を含んでいる必要があることを示す。(1) の *novela*, (4) の *diccionario* はどちらもその主体役割に指定されている情報が *empezar* が要求するこれらの意味的情報と一致するため, 読み込み可能である。一方, その目的役割に指定されている情報は, (1) の場合は *leer* でありその事象構造に P を含むため読み込み可能であるが, (4) の *diccionario* の場合,

¹⁰⁾ Pustejovsky (1991) によると, 「達成」と「到達」の違いは使役動作主の有無によるものであり事象構造が異なるものではなく, この違いは語彙概念構造 (ELC) で示されるものであるということである。彼は EE (事象構造) と ELC (語彙概念構造) の間に中間レベルの ELC' を想定し, このレベルで Vendler の「達成」と「到達」を区別する。例えば, 動詞 *open* は自動詞としても他動詞としても使用されるが, どちらの場合も事象構造は同じであり, 語彙概念構造で異なるのである。前者の場合は *become* (The door opened.), 後者の場合は *act* (John opened the door.) という異なる意味述語 (*become* と *act*) が ELC' にあり, それが語彙概念構造に反映されているためであると考えられる。ここで言う語彙概念構造とは語彙のつながりによる文全体の意味を示すものである。

¹¹⁾ 「推移」の事象構造をこのように表示すると (4c) が Vendler (1957) の「到達」を表し, (4c') が「達成」を表すと考えられるのであるが, Pustejovsky (1991) は (4c') は (4c) が表しうる事象の1つであり, 別のものではないと考えていると推察される。

¹²⁾ これは, *Estoy conociendo a María*. 「私はマリア (のこと) を知りつつある。」は *Conozco a María* 「私はマリアを知っている」を含意しないが, *Estoy leyendo la novela* 「私は小説を読んでいる」は *He leído (partes de) la novela*. 「すでに部分的に呼んでいる」を含意する。この場合, (6c') のように事象構造に P を含んでいれば進行 “estar + 現在分詞” により焦点化されるのはこの部分であり, 進行形を表す。一方, P を含んでいない場合, (c) における e2 には至らないが, そこに「近づきつつある」を表し, 「知りつつある (が「知る」にはまだ至っていない)」と解釈される。

その目的役割は“conocer (el sentido de una palabra)”であり、その事象構造にPを含まないため *empezar* が第二項に要求する条件にそぐわず、読み込みができない。それ故 (4) は主体役割のみ *empezar* により焦点化され、解釈可能となるのである。¹³⁾

以上のことを踏まえ、次章では身体名詞 *pie* の多義性について分析していく。

Ⅲ. 身体名詞の多義性

身体名詞の字義通りではない意味での使用が頻繁に見られ、またこれらの名詞を用いた慣用表現も多いということは、「抽象的な物事をより具体的に理解しやすい他の物事に見立てて表す」という認知の仕組みをメタファーと捉えている認知意味論的視点からすれば当然のことである。身体部位は人間に非常に身近なものであり、常に生きるために使用しているものだからである。また、スペイン語と日本語で同じ身体部位を表す名詞を中心に、類似の語彙により構成される慣用表現が見られることも理にかなったことである。慣用表現とはその表現を構成する語の意味の総計ではない、新たな意味を示すものであると考えられているが、前にも述べたように身体名詞が字義通りではない意味で解釈されるとききの表現がスペイン語と日本語において同じ意味を表す語により構成されている場合も多い。この点に着目し、語の多義性はその語が構造的に内包している情報によるものであることを、*pie* 「足」を例にみていく。

3.1. 身体名詞 *pie* の解釈

pie の特質構造は次のように想定される。

(7) QUALIA (役割) ¹⁴⁾	=	CONSTITUTIVO (構成)	=	(una parte de) humano
		FORMAL (形式)	=	base (que se apoya en el suelo) ¹⁵⁾
		TÉLICO (目的)	=	moverse

RAE (Real Academia Española) における *pie* の第一語義は“extremidad de cada uno de los dos miembros inferiores del cuerpo humano”であり、他に 20 の意味を持つ (<https://dle.rae.es/pie>) と記載されている。¹⁶⁾ 第一語義以外の語義は、第一語義において指定されている *pie* の人間の身体のおける

¹³⁾ De Miguel (2009) では *diccionario* の目的役割を *consultar* とし、この動詞が到達動詞であるため *empezar* が読み込むことができないとしている。しかしながら、*consultar* は *examinar* など P を含む例が多く、また *diccionario* の目的役割は *consultar* ではなく *conocer (el sentido) de una palabra* であると考え、このように示した。

¹⁴⁾ (3) で示した *novela* の特質構造と比較するとわかるように、*pie* の場合は主体役割が指定されていない。*novela* は作家が *escribir* 「書く」ことで存在するようになるため、主体役割には *escribir* 「書く」が記載されている。一方、身体部位を表す名詞である *pie* に関しては、このような主体役割は想定できない。この違いは、Pustejovsky (1995) において *objetos naturales* (自然物) と *objetos artificiales* (人工物) を分類する基準となっている。

¹⁵⁾ 形式役割を *base* 「土台」としたのは、その位置と形によるものである。

¹⁶⁾ 語義の数は辞書により異なる。

位置、形状、機能等に関連して派生していると言える。例えば、動物の足、家具や器物の脚、靴やソックスの足の部分、植物の茎、根元、土台、書類等の下部の余白、写真等のキャプション、頭部の反対の部分などが語義として取り上げられているのであるが、これらの意味はひとつずつ覚えていなくても、第一語義を覚えていればコンテキストから容易に導き出されるものである。例えば、los pies de la mesa「テーブルの足¹⁷⁾」と言えばテーブルを支えている部分を示し、nota de pie「足の注」と言えば脚注を表していることは容易に想像できる。

このように、ひとつの語が様々な語義を持つ場合でも、その多くは基本的語義を中心に意味が拡張され、意味的ネットワークを構成、コンテキストによりその一つの語義が焦点化され、全体の解釈がなされると考えられる。そうであるとするならば、スペイン語学習者にとっては辞書に記載されている多くの語義を一つ一つ覚える必要はなく、基本的語義及びどのようなプロセスを経て意味を拡張し、それぞれの意味を示すようになるのかを理解することにより語彙学習の労力を軽減することが可能となると考えられる。同時に、pieを用いた慣用表現に関しても、その表現はこの身体名詞の機能・形状などがその全体の意味に関与していることが多く観察され、慣用表現とは構成要素の意味の総計から全体の意味が予測されないものである、という定説に疑問を呈することになる。いずれにしても語彙の意味拡張を考察していくために、この身体名詞を用いた慣用表現を次に示し、それらが特質構造の1つの役割を焦点化することにより得られる意味であると同時に、スペイン語のpieと日本語の「足」が同じように解釈される場合、どちらの表現も類似の語彙により構成されていることをみていく。

(8)

	スペイン語	直訳	日本語訳
a	atar de pies y manos (a + 人)	(人の) 足と手を縛る	自由を奪う、身動きできなくする
b	con un pie en el estribo	踏み台に足を乗せて	出かける寸前に、死が近い
c	(arrastrarse) a los pies (de+ 人)	(人の) 足に這う	屈服する
d	parar los pies (+ 人)	人の足を止める	制止する
e	ir a pie	足に行く	徒歩で行く
f	poner pies en polvorosa	足をほこりの多いところにおく	逃げる
g	con pie (s) de plomo	鉛の足で	注意しながら、ゆっくりと
h	ser pies y manos de 人	人の足や手である	手となり足となる
i	pie de la copa	グラスの足	グラスのプレート
j	perder pie	水の中で足がつかない	狼狽する、混乱する
k	echar pie a tierra	地面に足を放つ	(乗り物などから) 下りる
l	estar con un pie en el aire	空中に浮かせた足とともに	不安定な状態である
m	tener un pie dentro y otro fuera	一方の足の中、他方を外におく	決めかねている
n	tener los pies en la tierra	地に足を持つ	現実的である

¹⁷⁾ 日本語では「脚」を使うところであるが、pieとの関連から「足」と表記した。

3.2. 人間を表す pie (構成役割の具現化)

a-c では, pie は身体部位のみではなく, その部位を所有する人間に言及すると解釈される. 身体部位を表す名詞でその所有者である人間を表す慣用表現は多く, 例えば *Faltan manos./Hay escasez de manos*. 「手が足りない⇒」(*mano* 「手」), *Cuatro ojos ven más que dos* 「4つの目の方が2つの目より良く見える⇒1人より2人で見た方が確かだ」(*ojo* 「目」), *partir/romper la boca* 「口を割るぞ⇒殴るぞ」(*boca* 「口」) などがその例である. 例えば *Faltan manos*. 「手が足りない」は人間の身体部位である「手」が独立して足りないわけではなく, 労働力として働く人間が足りないことを表す¹⁸⁾. これはそのまま日本語でも使用される表現である. このように直訳がそのまま日本語として使用されるわけではないが, その他の例についてもその字義的解釈から慣用表現が表しうることは理解可能である. いずれの場合にしても, 身体部位のみに言及しているわけではなくその部分を所有する人間に言及していると解釈される. つまり, 身体部位がそれを所有する人間を表すメトニミーの例である.¹⁹⁾

さて, pie を用いた表現であるが, (8a)-(8d) がこの例に相当する. 例えば, (8a) *pies y manos* (a 人) は, 「足」と「手」を縛ることにより, その所有者である人間を身動きできなくする, また, その自由を奪うという比喩的解釈が得られる. (8b) *con un pie en el estribo* に関しては, その「足」の所有者が出かける直前²⁰⁾ である, もしくは死に直面していることを表し, (8c) *arrastrarse a los pies* は, その「足」の所有者の方に這うことにより, その「人間」に屈服したことを表す. (8d) *parar los pies* (a 人) は「人の足を止める」から「制止する」の意味がもたらされる.²¹⁾

しかしながら, これらの表現は前述の *mano*, *boca*, *ojo* などの比喩表現とは異なり, pie 独自で「人間」と解釈される例を探すのは難しい. 例えば, (8a-d) いずれの表現においても, 表現全体がそれに続く事象のメトニミー (時間的近接性による原因と結果の関係) として機能している. その理由としては, *mano*, *boca*, *ojo* などとは異なり, pie の語彙情報に指定された機能 (目的役割に記載されている情報)

18) 身体名詞の構成役割が焦点化され「人間」を表すと解釈される場合, その目的役割も関与している. 例えば, *Faltan manos*. の *manos* を他の身体部位を表す名詞に変えることはできない. それは, それぞれの身体部位の機能, つまり目的役割に記載されている情報が異なるからである.

19) 身体部位を示す名詞が人間全体を表す比喩表現をシネクドキ (提喩) と考えることもある. シネクドキとメトニミーは, 前者が同じカテゴリーに分類される上位概念で下位概念を表したり, 下位概念で上位概念を表す比喩であり, 後者は空間的・時間的近接性に基づく比喩である点で異なる. 「花見」の例は, 「花」という上位語で「桜」という下位語を指すシネクドキであり, また「お茶しない?」の「お茶」は絶対にお茶でなければいけないわけではなく, コーヒーやジュースでも良いことから, 「お茶」という下位語で「飲み物」という上位語を示すシネクドキである. 一方, 「鍋でも食べない?」の「鍋」は鍋という物体を指すわけではなく, その中に入っている具材を示す. こちらは容器で内容物を指すメトニミーである. シネクドキとメトニミーの区別は研究者により立場が異なり, 部分と全体の関係をシネクドキと捉える立場をとれば, ここで扱う比喩表現はシネクドキであると考えられるであろう. 本稿では, シネクドキは類と種 (上位概念と下位概念) の関係に限定されると考えるため, 上記のような比喩表現はメトニミーの例であるとする. しかしながら, このような例でも見られるように, シネクドキとメトニミーは厳密に分けられるものではない. 谷口 (2003) のようにシネクドキはメトニミーの一種とみなすのが適切であると考えられる.

20) *estribo* は「あぶみ」であるが, もちろん馬に乗って出かける必要はない.

21) *Tuve que pararle los pies al compañero de trabajo que quería robar mi idea*. 「私は私のアイデアを盗もうとしていた同僚を止めなければならなかった」の例が示すように, (8d) の表現は「足」の動きだけを止めるのではなく, 「人間」の行為を止めることを表す.

が人間を第一に想定するものではない点にあると考えられる。例えば, manejar (cosas) を目的役割とする mano に対し, pie の目的役割は (7) に示したように moverse であり, これは人間 (もしくは動物) よりもむしろ交通手段等を表す語との関係が深い。それ故, コンテキストにより pie が人間として解釈されるに十分な情報が示されない限り, その解釈を得ることはできない。それ故, pie は表現内に共起する人間によりその「部分」であることを示し, 同時に表現全体が引き続き起こる事象の原因を表すメトニミーであると解釈される。

さて, (8c) の表現であるが, 前にも示したように字義的な意味は「(人の) 足の方に這う」であるが, 実際に足の方に這うわけではなく, 「服従」していることを表す。この解釈は足が人間の下位にある部位であることによりもたらされたものであると考えられる。しかしながら, 生成語彙論の枠組みにおいては「下方」と「服従」を結び付けることはできない。そこで, 認知意味論の考えをとり入れ, この解釈が得られる理由を示す。認知意味論における LO BUENO ES ARRIBA, LO MALO ES ABAJO という概念メタファーにより, 「楽しいことは上, 悲しいことは下」「健康と生命は上, 病気と死は下」「支配は上, 被支配は下」などの解釈が派生する。(8c) arrastrarse a los pies (de 人) では, 主語として実現される人が別の人の足 (身体で最も下にある部位であり被支配と解釈される) を目的地 (前置詞 a によりマークされている) としてそこに這っていくことにより, 服従の意を示すと解釈されるのである。

以上のことにより, 特質構造に記載された情報は世界をどのように概念化するかという視点を取り入れることにより拡大可能であり, それ故生成語彙論と認知意味論は相反する関係ではなく相補関係にあると考えるのである。

3.3. 移動を表す pie (目的役割の具現化)

(7) に示したように, この語の目的役割は moverse であると考えられる。この身体部位により実現される動作: andar, caminar, correr … などは moverse の概念の下に包括される。(8e)~(8h) の表現における pie がこれらの情報を具現化している。それがすぐに理解できるのは (8h) の表現であり, 日本語にも類似の構造を持ち同じ意味を表す慣用句がある。ser pies y manos de 人「誰かの手であり足である」という表現は, その手や足がもつ目的役割を焦点化し, その誰かの手や足であることで, その誰かを助けることを意味する。身体名詞の目的役割が焦点化されているわかりやすい例である。

また, 目的役割を焦点化した表現は共起する動詞の事象構造を選ぶことがある。(8e) では, a pie は事象構造に P を含む ir, venir, salir (T), あるいは andar, caminar, correr … (P)²²⁾ などと共起し, a pie は P を修飾し, 事象が「徒歩で」進行することを示す。

(8f) の動詞 poner は Transiciones の事象構造をもち, 前置詞 en により焦点化される結果状態 (los pies están en los polvos 「足はほこりの中にある」) を含意する。polvos 「ほこり」は「走る」ことによ

22) この場合, a pie の使用はトートロジーと考えられるが, 実際に同時に使用されている例は CREA (<https://www.rae.es/banco-de-datos/crea>) などに見られる。

り舞い上がるものであり、この表現は pie の目的役割が焦点化されていると考えられる。実際にこの表現の起源については様々な仮説があるのだが、たとえ正確なその起源を知らなくても字義通りの解釈と結びつけてこの表現を適切に解釈することは可能であろう。字義通りの解釈は「ほこりの中に足を置く」であり、その結果としてほこりの中に足がある状態であるということは、足によってほこりが存在している、つまり動くことによりほこりが舞い上がっていることを表し、「速く走る」⇒「逃げる」と解釈される。「逃げる」の意味まで行きつかなくても、「速く走る」「慌てて走る」とこの表現を解釈できれば、その他のコンテクストにより「逃げる」と解釈することは難しくないであろう。字義的解釈、比喩的解釈のどちらも pie の目的役割が焦点化されている例である。

最後に (8g) であるが、con pies de plomo の字義的な意味は「鉛の足で」であり、そこから「ゆっくりとした動作」⇒「用心深く」という解釈がなされる。この表現は hacer, actuar など、移動の意味はなくてもその事象構造に P をもつ動詞とは共起可能であり、その行為がゆっくりと、もしくは注意深く進んでいることを示す。一方、この表現は Estados の事象構造をもつ動詞 (6a) とは共起しにくい。それは E が時間経過にともなう変化を含意しないため、pie の目的役割に記載された情報とはそぐわないからである。

3.4. 土台を表す pie (形式役割の具現化)

(7) で示したように、pie の形式役割は base 「土台」であると考えられる。また、この概念に関連して sostener という付加的意味が生じ、pie は base として解釈されると同時に「支える (sostener)」という意味にも解釈される。(8i)～(8o) で使用されている pie から得られる解釈である²³⁾。(8i) el pie de la copa はグラスを支えるグラスのプレートを指す。グラスの下部にあり、本体を支えているという概念の類似性から成立するメタファー表現である。²⁴⁾しかしながら、この表現がメタファーによるものと認識することなく、この表現を構成するスペイン語の単語を知っていれば字義通りの解釈で何を指しているか理解可能であろう。²⁵⁾

RAE によると、(8j) には 2 つの意味がある。

²³⁾ 本稿では、sostener は pie の目的役割に規定されているのではなく、形式役割である base から生じる意味であり、形式役割を通して pie が sostener の解釈を受けると考える。

²⁴⁾ pie ではなく、base を使い、base de la copa ということもある。また、グラスのステムを表す語としては pierna 「脚」を使う例もみられるが、tallo 「幹・莖」、fuste 「(槍の) 柄」を使用することが多い。

²⁵⁾ スペイン語の pie がグラスのプレート部分を指すのに対し、日本語では「グラスのあし」はステムを表し、グラスを数える際の助数詞に「脚」を使う。この助数詞は「脚」が付いている家具などを数える時にも使用される。スペイン語には、足首から先を表す pie と、主に膝から足首までを指す pierna という語があり、日本語の「足」と「脚」に相当するが、日本語の場合、音声的には同じであり、両者を厳密に区別しているわけでない。立川 (2000) が述べているように、脚と足の違いを意識することはあまりなく、「足が棒になる」と言えば文字通りどちらも棒になっているようにイメージする。(立川, 2000: 84)。しかし、興味深いことに読み方は違うが同じ語を使用する助数詞を考えると、「足」はソックスや靴など、ペアになった一組を指す場合に使用され、「脚」とは異なる。身体名詞としての「脚」と「足」、助数詞としての「脚」と「足」については、身体名詞として使用される場合のそれぞれの特質構造に記載された情報が助数詞としての使い分けに関係していると想定される。

(9) perder pie

- a. loc. verb. Dicho de alguien que entra en el mar, en un río, lago, etc.: No encontrar el fondo en el agua.
 b. loc. verb. Confundirse y no hallar salida en el discurso.

perder pie の字義的な訳は「足を失う」であるが、(9a) は「水の中で背が立たない」、(9b) は「混乱し解決策が見つからない」ことを意味する。(9b) の意味は (9a) からメタファーのプロセスを経て派生したものである。動詞 perder は “pasar de estar a no estar” 「有→無」を表し、その事象構造は T (6c) である。それ故、(9a) と (9b) のどちらも Transiciones の下位事象 E は “no tener la base que sostiene (a uno mismo)” 「(自分自身を) 支える土台がない」と解釈される。(9a) の pie は字義的意味である身体名詞「足」を指し、底が見つからなければ「足」が支えるための「土台」として機能することができない⇒「水の中で背が立たない」という意味に解釈され、(9b) はさらに pie の形式役割のみが焦点化され、安定的な精神を支える「土台」として解釈される。

このような pie の形式役割が焦点化される表現において、その役割が焦点化されるのは事象構造に E を含む動詞句による。(7) に示した特質構造からもわかるように、身体部位を表す名詞の特質構造においては、その起源や発生についての情報を記載している主体役割については指定されていない。しかしながら、形式役割に記載される情報は主体役割と原因・結果の関係にある(小野, 2005)。その生成に関わる主体役割が規定されていない場合でも、形式役割が語彙が内包する情報の結果部分に相当するとすれば、(6c) の下位事象 E に対応すると考えるのは妥当である。動詞 perder の事象構造は (6c) であり、その下位事象である E は共起する pie の形式役割を焦点化し、base 「土台」の解釈がもたらされる。

また、(8k)~(8n) の表現も、pie の形式役割 (base) が焦点化されていると解釈される。(8k) の表現で使用されている動詞 echar は (6c) の事象構造、つまり、Transiciones 「推移」を内包する。a tierra 「地面に」は pie が置かれる場所を表す。次に (8l)~(8n) の表現で使用されている動詞であるが、これらは estar, tener という状態 E (6a) に相当する動詞であり、やはり pie の形式役割を焦点化している。いずれの場合も字義通りには pie 「足」を「空中において」(8m)、「一方を中に、他方を外に持って」から、「不安定だ」(8m)、「決めかねている」(8n) と比喩的に解釈される。これらの解釈は pie が base 「土台」を含意するとすれば字義通りの解釈からも得られる比喩的解釈であり、特に成句として認識し、記憶していなくても適切に解釈することが可能である。

3.5. pie を用いた表現についてのまとめ

以上、この章では特質構造に記載された役割ごとに pie が字義通りに解釈されない例を概観した。構成役割 (humano 「人間」)、目的役割 (moverse 「移動する」)、形式役割 (base 「土台」) に関連する解釈は、それぞれ共起する要素との関係でこれらの役割の1つが焦点化され、その表現における意味が決定される。

特質構造のどの役割が焦点化されるかは、共起する動詞の事象構造に関係する。前述のように、目的役割が焦点化される条件は動詞の事象構造が下位事象に P を含意していること、形式役割が焦点化される条件は下位事象に E を含意していることが必要である。

IV. 日本語の「足」を用いた比喻表現について

日本語の「足」を用いた比喻表現について、スペイン語の *pie* を用いた表現との比較で簡単に見ておきたい。「足」も *pie* の特質構造に記載された役割の 1 つを焦点化することにより比喩的に解釈される²⁶⁾ 選抜試験などで基準に満たない受験生を切り捨てることを表す「足切り」は「足」で「人」（構成役割）を表す *metonimia* であり、表現全体としては、候補者全員が人間の身体、足は成績が下の方の方の候補者示し、これらの人々を選考の対象から外すことを表すメタファーであると考えられる。「足」の形式役割が焦点化される例は、*pie* の形式役割についてみたように「ガラスのあし」や、「机のあし」「椅子のあし」に見られるが、この場合、日本語では「足」ではなく「脚」（*pierna*）が使われる。そうになると、厳密には「足」と区別することになる。ただ、「足」を *base* 「土台」と解釈する例は「足をすくう／すくわれる」に見られ、これらも「足」の形式役割を焦点化している例と考えられる。また、「足」の目的役割が焦点化され、「移動手段」として解釈される表現も多い。「足が重い」「足がつく」「足が遠のく」「足が向く」などである。

興味深いのは、「足」と同じように四肢の一部である「手」を用いた表現で、共起するその他の語が同じであるにも関わらず、その解釈に構成役割が読み込まれるか否かが異なる点である。Tokunaga (2009) において、身体名詞の構成役割が焦点化された比喻表現では、同時にその目的役割も焦点化される、と述べた。それ故、*Faltan manos* 「手が足りない」は「人が足りない」と解釈されるが、その「人」は誰でも良いわけではなく、助け (*mano* の目的役割に記載された情報) になってくれる人である必要がある。日本語の「手がない」は「人（手）が足りない」という意味で構成役割が解釈に読み込まれることもあるが、未指定で「施すべき手段・方法がない」と解釈されることもある。これらの解釈及び字義通りの解釈のどれが選択されるかは、コンテキストによる。

一方、「足がない」は「移動手段がない」を意味するが、「手」の場合とは異なり、その構成役割が読み込まれることはなく、むしろ他交通手段など他の語に関連付けられる。この違いは、「手」の目的役割に記載された情報が主に人間により実行されるものであるのに対し、「足」の目的役割に記載された情報は主に交通手段により実行されるものと考えられることによるとと思われる。それ故、表現の意味的構成は同じであるものの、その解釈に「人間」が含意されるか否かで異なるのである。

²⁶⁾ 人間の身体部位を表す名詞は言語に関わらず同じ特質構造を所有すると考えられる。ただし、言語により基本的な使用する語がカバーする範囲が異なるような場合は考察する必要がある。

V. おわりに

以上、スペイン語の pie を含む比喩表現をついてみてきたが、この語が表す様々な意味は語に内在している特質構造から予測可能であることを示した。同時に、日本語において対応する語「足」が同じように比喩的に解釈されること、しかしある程度の相違があることについても言及した。いずれの場合も同一表現内に共起する他の語との関係から、特質構造の一部の役割が焦点化され、適切な解釈がなされる。この役割の焦点化により、比喩的な解釈は字義通りの解釈と同じプロセスを経て得られると考えられる。

日本語の「足」を使用した表現については簡単に触れただけであるが、それでもスペイン語の pie との間に意味の拡張についての違いがあることを示した。それは、両者の特質構造に記載された情報が異なることによると考える。その理由について、まず日本語の「あし」は漢字によりスペイン語の pierna と pie を分けることは可能であるが、その違いは厳密ではないことがあげられる。²⁷⁾ それ故、pie と「あし」の特質構造に記載された情報には若干の違いがあると想定される。また、スペイン語には動物の脚を表す pata という語もあり、これも家具の脚を表す際によく使用される。次に特質構造に記載された情報からさらに他の語への意味的拡大の仕方の違いによる。例えば、日本語の「足」はその目的役割から「交通手段」と解釈され、また「移動」という目的役割から「お金」という解釈がされる。しかしスペイン語の pie にこのような意味の拡大はなされない。このような意味的拡大の方向性の決定は生成語彙論よりも認知意味論の枠組みにより説明可能であると考えられる。比喩表現及び慣用表現は歴史的・社会文化的及び概念的なものに基づくものであることは認識しているが、それでもその語の特質構造に含まれる情報の一部が共起する他の語により焦点化されることによりある程度字義通りに解釈することで適切な比喩表現の解釈が可能になるといえる。その後さらに適切な解釈を得るためには、認知意味論の概念が必要であると思われる。それは「足」の構成役割と LO BUENO ES ARRIBA, LO MALO ES ABAJO という方向メタファーを結び付けることにより可能となる比喩的解釈があることから示されるであろう。

これまで述べて来たことは、日本におけるスペイン語教育という場で応用可能である。前述のとおり、近年多くの学生が「外国語を勉強することは単語の意味を覚えること」と外国語学習と単語の暗記を同等と考えている。実際には単語を覚えただけで外国語を使えるようにはならないのであるが、学生たちが「単語を覚えること」が重要と認識しているのであれば、語の意味を羅列するのではなく、本稿で示した生成語彙論における特質構造、事象構造に記載されている情報を理解しやすい形で彼らに提示し、共起する他の語とどのような関係を結び、適切な解釈が得られるのかを伝えることが学習者の理解を深めると考える。同時に、1つの語がコンテキストにより受ける様々な解釈は、その語が内包するいろいろな情報の一部が共起する語により焦点化されることにより得られるものであり、それぞれの解釈は独

²⁷⁾ 注24も参照のこと。

立しているのではなく意味的ネットワークを形成しているということが理解できれば、字義通りの解釈からも比喩的解釈が導き出せるようになると思われる。

その端緒として身体部位を表す名詞を用いた比喩表現を取り上げることは、語の多義性を示すために非常に有益である。身体部位はその機能、形式など全人類に共通するものであるので理解しやすいと同時に、異なる表現がある場合、それは文化的もしくは社会的な理由によるもの、認知の違いによるもの、また、日本語では「あし」とされる部位が、スペイン語では *pie*, *pierna*, *pata* と状況により異なることも異文化理解を促すことにつながると考えるのである。

参考文献

- Climent Roca, S. (2000), 'Individuación e información Parte-Todo. Representación para el procesamiento computacional del lenguaje', *Estudios de Lingüística Española*, vol. 8 (revista informática, Comunidad Virtual de Usuarios asociada a Infoling).
- Corpas pastor, G. (1997), *Manual de fraseología española*. Madrid: Gredos.
- Fernández Jaén, J. (2019), *El abecedé de la lingüística cognitiva*, Madrid: Arco/Libros.
- Forment Fernández, M. (1998), 'La didáctica de la fraseología ayer y hoy: del aprendizaje memorístico al agrupamiento en los repertorios de funciones comunicativas', *Especulo, nm*. Madrid: UCM. Recuperado de http://webs.ucm.es/info/especulo/numero10/did_fras.html
- García Murais, M. (1997), 'Propuestas para la enseñanza de unidades fraseológicas en la clase de E/LE', en Alonso, K., Moreno, F. y Gil, M. (eds.), *Actas del VIII Congreso Internacional de ASELE* (pp. 363-370). Recuperado de https://cvc.cervantes.es/ensenanza/biblioteca_ele/asele/pdf/08/08_0361.pdf
- González Pérez (2006), 'Unidades fraseológicas en las hablas castellanas'. En *EULA* 20 (pp. 149-156). Recuperado de https://rua.ua.es/dspace/bitstream/10045/6078/1/ELUA_20_07.pdf
- Kovecses (2000), *Metaphor and Emotion: Language, Culture, and Body in Human Feeling (Studies in Emotion and Social Interaction.)* Cambridge: Cambridge University Press.
- Mendízabal de la Cruz, M. y M. Sastre Ruano (2017) . 'Problemas de las unidades fraseológicas verbales y su aplicación a la enseñanza del español como lengua extranjera' en Del Barrio de la Rosa, F. (coord.), *Palabras vocabulario léxico. La lexicología aplicada a la didáctica y a la diacronía* (pp. 49-62). Venezia: Edizioni Ca Foscari. Recuperado de <https://www.studocu.com/en/document/universita-degli-studi-di-sassari/lingua-spagnola/lecture-notes/problemas-de-las-unidades-fraseologicas-verbales-y-su-aplicacion-a-la-ensenanza-del-espanol-clasificaciones-ufs/5300405/view>
- Miguel, E. De (2009). 'La Teoría del Lexión Generativo'. En De Miguel, E (ed.), *Panorama de la lexicografía*, capítulo 5 (pp. 337-368). Madrid: Ariel.
- Navarro, C. (2004). *Didáctica de las unidades fraseológicas*. Madrid: Edinumen. Recuperado de https://tienda00.edinumen.es/index.php?option=com_content&view=article&id=93&catid=13&Itemid=51
- Navarro, C. (2007). 'Fraseología contrastiva del español y el italiano (Análisis de un corpus bilingüe)'. En Tonos Digital (13). <https://www.tonosdigital.com/ojs/index.php/tonos/article/view/121/105>
- Nissen, U.K. (2006), "'¡Ojo!" Un análisis contrastivo de metáforas y metonimias', en De Miguel, E., A. Palacios y A. Serradilla (eds.) *Estructuras léxicas y estructura del léxico*, Frankfurt: Peter Lang.
- Penadés Martínez, I. (1999), *La enseñanza de las unidades fraseológicas*. Madrid: Arco/Libros.
- Pustejovsky, J. (1991), 'The Syntax of Event Structure' en Levin, B. y S. Pinker (eds.), *Lexical and Conceptual Structure* (pp. 47-81), Oxford: Blackwell.
- Pustejovsky, J. (1995), *The Generative Lexicon*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- RAE (2018), [edición del tricentenario]: *Diccionario de la Lengua Española*. Recuperado de <https://dle.rae.es/>
- Ruiz Gurrillo (2001), 'Un enfoque didáctico de la fraseología para extranjeros', en Coperías, M. Redondo, J. y Sanmartín, J. (eds.), *Quaderns de filologia estudis lingüistics V, Aprendizaje y enseñanza de una segunda lengua* (pp. 259-276). Valencia: Universitat de València. Recuperado de <http://webs.ucm.es/info/especulo/ele/fraseolo.html>

- Serradilla, A. (2000), 'La enseñanza de frases hechas: un método para integrar la cultura en el aula' en *Actas del XI Congreso Internacional de ASELE* (pp. 657-664), Zaragoza: Universidad de Zaragoza. Recuperado de http://cvc.cervantes.es/ensenanza/biblioteca_ele/asele/pdf/11/11_0657.pdf
- Seco, M., Andrés, O. y Ramos, G. (eds.) (2004). *Diccionario fraseológico documentado del español actual*. Madrid: Aguilar.
- Szyndler, A. (2015). La fraseología en el aula de E/LE. ¿un reto difícil de alcanzar? Una aproximación a la fraseodidáctica. *Didáctica. Lengua y literatura* 27 (pp. 197-216). Recuperado de https://www.researchgate.net/publication/334401284_La_fraseologia_en_el_aula_de_ELE_un_reto_dificil_de_alcanzar_Una_aproximacion_a_la_fraseodidactica.
- Tokunaga, S. (2009), 'Extensión de significados: un estudio entre el español y el japonés', en De Miguel, E., S. U. Sánchez, A. Serradilla, R. Radulescu y O. Batiukova (eds.), *Fronteras de un diccionario. Las palabras en movimiento* (pp. 435-467). San Millán de la Cogolla: Cilengua.
- Tokunaga, S. (2021), 'Indagar en el significado de las palabras clave: una propuesta para la enseñanza de unidades fraseológicas del español a estudiantes japoneses', *Internacionalización y enseñanza del español como LE/L2: plurilingüismo y comunicación intercultural de ASELE* (pp. 512-528).
- Vendler, Z. (1967), *Linguistics and Philosophy*, New York: Cornell University Press.
- VV.AA. (2012). *Gran diccionario de la lengua española*. Larousse.
- 小野尚之 (2005), 『生成語彙意味論』, くろしお出版.
- 立川昭二 (2000), 『からだことば』, 早川書房.
- 谷口一美 (2003), 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』, 研究社.
- 宮城昇・山田義郎監修 (1999) 『現代スペイン語辞典』 (改訂版), 白水社.